

太地の捕鯨

動物応用科学科3年 高橋菜里

外国から見た捕鯨

2009年、「The Cove(入り江)」という映画が、ある映画祭で観客賞を受賞し、欧米諸国を中心に話題となりました。これは和歌山県太地町のイルカ追い込み漁を盗撮（許可を取らず、カメラを隠して）し、漁の残酷さ、イルカを食べる事の問題点などを告発するといった内容のドキュメンタリーです。ちょうどこの映画が日本のメディアを賑わせた夏の終わり頃、私は舞台となった太地町・くじらの博物館で実習をしていました。

9月1日、追い込み漁解禁の日。町中に白人とTV局のカメラが溢れました。漁は連日の時化のため順延されていましたが、その人々は博物館内にも押し寄せ、イルカ・鯨を食べる町の水族館を視察していました。私はその時クジラプールの隅で、お客さんがクジラにあげる魚を売っていたのですが、誰一人興味を示しません。13歳くらいの白人の男の子が、とても陰い顔でクジラショーを観ていました。

また太地町と姉妹都市であったオーストラリアのブルーム市は、追い込み漁解禁の報を受け、姉妹都市協定を解消すると宣言しました。オーストラリアは動物の、特に鯨類の愛護活動が盛んな反捕鯨国。ブルーム市としても、高まった市民の声を無視するわけにはいかなかった、致し方ない決断なのだろうと、学芸員の方は言われました。

太地の人々が考える、太地の捕鯨

太地はとても小さな町です。スーパーは漁

協前の一軒しかありません。日本の捕鯨発祥の地として、かつては大型のヒゲクジラも、捕獲禁止になった今では小型のハクジラを生活の糧としています。町ぐるみでの捕鯨“鯨組”の文化が根付いているのでしょう。会う人会う人知り合いのようで、実習生の私にも皆とても良くしてくれました。世界中から非難されている太地は、そんな町でした。

金儲けのために捕鯨していると言われていますが、メディアへの対応や、愛護団体に壊された漁具の修繕費などが相当かかるため、実際はいつそ捕鯨をやめた方が経済的に楽になるそうです。それでもなお捕鯨を続ける理由は、太地の文化と誇り、代々捕鯨で生計を立ててきた人々の生活を守るため、それを孫子の代まで遺すためと、町の大人は言いました。

実習を手伝ってくれた高校生の男の子（地元の子）に、こっそり「正直、鯨捕って食べることどう思う？」と聞いてみました。男の子は小声になって、「捕らん方がええんとちゃうかな」世界中を敵に回してまで捕ることない。父ちゃん達が苦勞してるのを見るのは辛い。いつそやめれば悪口叩かれずに済むのに…と言っていました。

可愛いイルカを食べるということ

くじらの博物館では、追い込み漁の対象種であるハンドウイルカやゴンドウクジラ類を飼育しています。追い込み漁は他地域の漁法と違い、生体での捕獲が可能のため、日本の水族館で新規加入されるイルカのほとんどは、

太地で捕獲された個体です。飼育には2、3歳の若くて健康な個体が適しているため、食用になるイルカと飼育用のイルカを選別する必要があり、それを担うのが、くじらの博物館飼育スタッフです。

“鯨を食べる町でイルカ・クジラを飼育する”という点は、私の地元・南房総と共通します。そしてやはり同じ質問を受けるそうです。「なぜイルカを可愛がっている一方で、殺して食べることができるの？」この二つは矛盾するのでしょうか。

お世話になったスタッフの方は、大学時代、小笠原でザトウクジラの個体識別をしていたそうです。仮にザトウの捕獲が解禁になったとしても、見知った個体を食べたくはない、と言われました。選別の時の心境を聞くと、自分もイルカを食べるし食用の個体は食用として見る、しかし「飼育用と決めた瞬間、一こいつを何が何でも長生きさせ、幸せにしてやる！ーと決意する」のだそうです。

私もおそらく同じ考えで、食べるか可愛がるかは、その個体への愛着の有無で分けています。同じように、私は中国で犬が食べられていることに疑問はありません。もし旅先で食事に出されても平気で食べるでしょう。それが我が家の愛犬でなければ。私が可愛いイルカを食べることができるのは、動物種で食べる・食べないを決めているのではなく、同じ種でも飼育個体は友として・食用個体はスーパーの豚肉と同じく食肉として見ているからです。

小型沿岸捕鯨は止めるべき？

現在 IWC では小型鯨類の捕獲は制限されておらず、日本の小型沿岸捕鯨は国が定めた捕獲枠に従って行われています。しかし最近、その対象種である小型ハクジラ類も IWC 管轄の下、捕獲制限・禁止すべきとの意見が多く、反捕鯨国から挙がっています。その理由は、個体数が減少しているから、ではなく、減少してしまう「かもしれない」からです。それが本当なら、制限をつけるべきなのだと思います。しかし減少の傾向があるかどうかははっきりとせず、ただ一頭でも殺すのは許せない、といった感情論からではないかと疑ってしまいます。

一方で、捕獲枠がないが水族館が欲しがっているような種のイルカを、故意に定置網に追い込んで、混獲（勝手に網に入ってきた）扱いで捕獲し、水族館に売っているのではないかという噂を聞きます。それが事実だとしたら、制限を厳しくした方がいいでしょう。

捕鯨を続けるべきか、止めるべきか。日本の中でも、太地町の中でも、私個人の中でも、答えは出ていません。その答えを出すために、私は鯨類の研究をしていこうと思います。世論や歪められた「データ」ではなく、生物学を見る目と、生活する人々の本当の暮らしを見る目を持って。